

## 論文審査の結果の要旨

氏名：王 梓玥 WANG ZIYUE

博士の専攻分野の名称：博士（芸術学）

論文題名：都市体験と郁達夫

審査委員：（主査） 教授 百 木 逸 楊

（副査） 教授 上 田 薫 特任教授 堀 邦 維

特任教授 植 月 恵一郎

郁達夫は日本でもよく知られる中国現代文学史上重要な作家の一人である。彼は1913年9月17歳の時日本に留学し、1922年7月26歳まで9年間名古屋と東京に住み、そのころに出会った後藤隆子という日本人女性をモデルに自伝小説『沈淪』を創作し、中国文壇でデビューを果たした。

日本に留学して、滞在期間中に会った留学生仲間の郭沫若や成仿吾などと友情を育み、文学同好となったばかりでなく、当時日本文壇で活躍していた佐藤春夫とも親交を深めたという。これらの出会いは彼にとって、無論作家への道に進む重要なきっかけになっただろう。

1922年7月26歳の郁達夫は中国に帰国し、一旦上海に居を構えたも、すぐに北京に移り住んで、その後、1938年の暮シンガポールに渡るまでは、武昌、広州、福州、上海、杭州などを転々して、どこか一つの町に3年以上留まることはなかった。

中日間を行き来した学生時代も、中国大地を飛び回った作家時代も、南洋で放浪した晩年も、郁達夫の49年の人生はつまり、定住の地を持たずに彷徨い続けたのだった。作家はあえて「流浪」の生き方を選んだことで、自らの都市体験を作品に取り入れ、独特の世界観を反映する文体と作風を確立させたのである。

王さんは、これまでの郁達夫研究でほとんど触れてこなかったその「流浪人生」に着目し、とりわけ彼に大きな影響を与えたのであろう、名古屋、東京、上海、北京、杭州の五つの都市を捉えて、大量の資料をもとにテキストを丹念に分析し、郁達夫作品とその「都市体験」の関係を論じた。

「都市」という用語から、たとえば、前田愛の『都市空間のなかの文学』のような分析を期待してはいけない。たしかに、前田はもとより、パークの『実験室としての都市』や龍迪勇の『空間叙事学』の影響の痕跡はあるものの、著者独自の捉え方をしていることは疑いない。

つまり、当時の日本や中国有数の都市を体験することで、そこに生起する吉凶禍福を舐め尽くし、高等遊民でありながら、決して申し上がっていくことなどなく、恋を追求しても成就することはなく、定位しないまま、結局、そこに絶望し、そこから疎外され、打ちひしがれ、苦悶もがいている「余計者」（「零余者」）としての郁達夫の抽出に成功したと言えるだろう。

では、本論を都市論ではなく、「余計者」論として見たらどうだろう。ツルゲーネフの『余計者の日記』を郁達夫が訳したとき、高い理想と教養を持ちながらも現実に対しては無力な、いわゆる「余計者」の概念を、言い換えれば、自己否定の理念を受け継いでいたことは、郁達夫論では周知の事実ではある。この、これまでどうにも捉えどころのなかった、曖昧な「余計者」を著者は「都市」に視点を据えることで一つ決着をつけたとも言えるだろう。

第1章は、郁達夫が10年間暮らした日本の名古屋と東京に焦点を当てて論じている。日本という不慣れな国で、しかも大都市という環境の中で郁達夫は苦悶するが、それを王さんは「性の苦悶と生の苦悶」と表現して、青年期に普遍的にありがちな生きづらさとしてとらえていると同時に、異国にあることでいわば必然的に生じる文化的アイデンティティの危機としてもとらえて論じている。近代的自我という表現が日本の近代文学を論じる際に用いられるが、それは、明治期以降の西洋化の波の中で、日本の若き文学者たちが抱えていた問題でもある。郁達夫は日本文学の影響を受けることで、自然に同様の問題を共有することになり、加えて、郁達夫が中国人であるという要素は、さらにその文学のありようを複雑にしている。

この点について、王さんは必要な関連文献にあたり、当時の日本文学の状況を理解したうえで周到に論じている。とくに、佐藤春夫と厨川白村の郁達夫への文学上の影響についての論考には、注目すべき点が多い。佐藤春夫はモダニストとしての側面が強く、それが郁達夫との関係を悪くしているのではないかと思わせるが、他方、厨川白村は、まさに近代的自我の様々な葛藤を体現しているという点で、郁達夫としては共感できる点が多かったのではないかという指摘は、納得させられる。

第2章は、郁達夫の上海経験についての考察である。中国に戻ったからといって、作家が安心して生活できたというわけではなく、上海はでこの都市特有の葛藤の中に身をさらすことになる。それは、中国の田舎から流入する封建的な勢力と、半植民地的状況がもたらす、国際的で現代的な価値との葛藤ともいえる。当時の上海は、中国だけでなく、おそらくアジアで最も国際的な都市空間であったに違いない。郁達夫はこの地で、短編小説集の『沈淪』を出版して自身の文学的キャリアを開始することになるが、王さんはその背景的要素として、次の二点を指摘する——①作品に描かれる作家の自伝的要素、すなわち都会生活の孤独、苦悩、感傷が、上海に住まう地方出身の若者たちの共感を呼んだ。②上海のリベラルな出版環境と都市の読者の美意識が郁達夫の作品を受け入れた。

この指摘は、都市というものが普遍的に有する価値と、郁達夫が日本生活を通じて獲得した都市感覚と近代的自意識が、この上海という都市空間の中で出会ったことこそが、彼の文学の本髄を形成したという王さんの論考はとても優れていると言わざるを得ない。

繰り返しになるが、もし前田愛のような手法を取るなら、著者は、横光利一の『上海』よりも、前田河広一郎の『上海の宿』の分析に着手したであろうし、あるいは、梶井基次郎の三重県松阪市での体験を語った『城のある町にて』の精緻な分析である、池田朋子と紺野昭による「文学作品中の空間描写から都市・地域景観を読み取る方法に関する研究」のような論文も書けたであろう。しかし、著者は断じてそうはしていない。本論は、単に都市空間と文学空間を並行させるものではなく、清水徹他の『都市の解剖学』にあるように、文学と都市との関係を「暗喩」として捉えるのでもなく、都市体験とその体験者「余計者」の関係を暴くものだからだ。

第3章北京を扱った章では、郁達夫の作品の大きな特徴の一つが、景色の描写であることを著者は指摘し、北京の都市部と云うよりもとくに北平の田園自然に関心を持っていたことに注目する。さらに郁達夫の『小説論』では、自然の風景や天候の描写などが小説のもっとも美しい装飾であると考えていたことに言及し、郁達夫の「北京」は、実は都市とは乖離し、伝統的中国文化である「隠遁」でもあったことへの注意を喚起する点も脱構築的読解を示しているようで興味深い。

第4章、「杭州の倦鳥」と題した杭州論でも、小説を「美化」する要素として、やはり自然の風景や天候気候の精緻な描写を挙げ、それを丹念に杭州に関する作品に読み取り、監獄と見なした上海と対照的に杭州を「詩的理想郷」と捉えている。同時に、東京、上海、北京の孤独感、漂泊感と杭州の故郷のような温かさと安心感の違いを際立たせてもいる。郁達夫の空間的紀行文を歴史的時文的文脈に置き直し、奥行きのある捉え方をしている点も評価していいだろう。

よって本論文は、博士（芸術学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

令和 5 年 1 月 2 3 日